

① 所属名：第 23 回東北作業療法学会

実行委員長（山形県立保健医療大学）（やまがたけんりつほけにり
ようだいがく）

② 協会会員番号：1177

③ 氏名：藤井浩美（ふじいひろみ）

④ 所属県士会：山形県作業療法士会

⑤ タイトル：20 年前の記憶

⑥ 本文：

「十年一昔」という四字熟語から言えば、この記憶は、昔々のお話である。それは 1991 年（平成 3 年）9 月 28 日（土）の早朝のことだった。爆音にも似た騒音の中で目覚めた私は、一足先に起きて屋外を覗いていた妻の「自動車が壊れそう!」との悲鳴に窓際に駆け寄った。外を見ると愛車の数センチまで迫る勢いで立木が押し寄せていた。後に“リンゴ台風”と呼ばれる台風 19 号の襲来だった。暴風の中、私は無我夢中で愛車に乗り込み広場に回避した。

その日は、第 2 回東北作業療法学会（東北学会）が弘前市民会館（青森県）で行われる日だった。当時、私は東北学会の事務局長であり、暴風雨がひと段落した時点で一目散に会場へ向かった。途中のリンゴ畑は、落下した収穫間際のリンゴで「赤い絨毯」のようだった。街中のあちこちで信号機や立木が倒れ、トタン屋根が飛ばされて電線に引っ掛かり、道路には障害物が散乱していた。もちろん、市内全域が停電し、車の運転には緊張を要した。

会場には、次々に実行委員が集まり、東北学会の開催を協議した。停電のため、照明やスライド機器はもとより、トイレも使用できなかった。幸い、会場が弘前城の公園内にあったため、約 500 m 先の公衆トイレが使用可能と分かった。午前 10 時、私たちは予定通りに東北学会を開催することとした。その間、照明器具を確保するべく、発電機の手配やろうソク、カンデラ、懐中電灯などの買い出し隊を市内の店に派遣した。

結果、スライドなしの特別講演と演題発表、ろうソクの明かりが頼りの懇親会、いち早く復旧した鍛冶町でのドンチャン騒ぎの二次会、翌朝の抜けるような青空、予想を大幅に超える参加者、そして、東北の作業療法士はひとつになった。開催が危ぶまれる中、東北各地から沢山の人が弘前に参集してくれた。この事実は、私の心に強く残った。“東北はひとつ!” この言葉が 20 年前の記憶から蘇る! 自然環境が厳しい東北地方であるからこそ、東北人には根性も懇情もある。不言実行! 有言実行! いずれにしても行動あるのみ! 20 年の歳月が過ぎた今、私はこの頃そう思うのである。